

第36回

令和3年度

小泉八雲をよむ

感想文・詩
入賞作品集

松江市
松江市教育委員会
八雲会



文豪小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）は、松江での一年三ヶ月にわたる暮らしのなかで、当時失われつつあった古き良き日本の面影を見出し、美しい文章に載せて全世界に紹介しました。松江市では、「国際文化観光都市・松江」の礎を築いた小泉八雲の顕彰を目的とした様々な事業を行っています。

昭和六十一年から毎年行っている「小泉八雲をよむ」感想文・詩の募集事業も今年で三十六回目となりました。今回は、感想文八十四編、詩五十一編、合計一三五編の力作をお寄せいただきました。

作品集には、応募作品のうち優秀賞、優良賞及び佳作を受賞した十五編の作品を掲載しています。多くの皆様にこの作品集をご覧いただき、小泉八雲を身近に感じる契機としていただきたと考えています。

結びに、ご応募いただきました皆様をはじめ、この事業にご協力いただきました皆様方に感謝申し上げます。

令和四年三月

主 催 松 江 市

松江市教育委員会
八 雲 会

後 援 毎日新聞松江支局
B S S 山陰放送
小泉八雲記念館

目次

第36回 感想文 入賞者

★小学生の部

〈優秀賞〉

「鳥取のふとんの話」にみる深い兄弟愛

島根県松江市 原田 佳奈美……………1

講評……………2

★中学生の部

〈優秀賞〉

八雲と草ひばりがかかえた孤独で美しい世界

「草ひばり」を読んで

神奈川県横浜市 内田 博仁……………2

講評……………4

★高校生の部

〈優秀賞〉

雪解けに込められた小泉八雲の想い

東京都調布市 若林 未華……………4

〈優良賞〉

小泉八雲の怪談

山口県熊毛郡 上岡 京史……………6

〈佳作〉

Hi-mawari

京都府京都市 秋山 あかね……………7

講評……………9

★一般の部

〈優秀賞〉

言葉の力

熊本県熊本市 貴田 雄介……………9

〈優良賞〉

僧になった男

埼玉県狭山市 長澤 真理……………11

〈佳作〉

小泉八雲の見た日本女性「ある女の日記」より

島根県出雲市 山田 敏子……………13

怪談・奇談における「出会いと別れ」

「小泉八雲集における救い」

佐賀県唐津市 松本 航平……………15

さくら

静岡県静岡市 山梨 由美子……………16

講評……………18

第33回 詩 入賞者

〈優秀賞〉

鏡のなかの母

広島県呉市 木塚 康成……………19

〈優良賞〉

あの者たち

岐阜県羽島郡 久生……………20

〈佳作〉

蠅

埼玉県さいたま市 あんのくるみ……………21

小さな幸せ

島根県大田市 山形 淑華……………22

まちのこどう

島根県松江市 日下 路子……………23

講評……………24

感想文

小学生の部

〈優秀賞〉

「鳥取のふとんの話」にみる深い兄弟愛

鳥根県松江市 原 田 佳奈美

私は総合の時間に、小泉八雲の怪談「あめを買う女」、「おしどり」、「むじな」、「鳥取のふとんの話」を読みました。怪談はとても怖い話だと思っていましたが、実さいには、ちがっていました。特に私の心に残った話は「鳥取のふとんの話」です。

鳥取の宿屋で、何人もの宿泊客たちがふとんから「にいさん寒かろう」「おまえ寒かろう」という声がすると訴えるので、主人がその原因を調べました。その結果、次のような悲しい話が分かりました。

そのふとんは貧しい家族のものでした。その夫婦は病気で亡くなり、幼い二人の兄弟は家にある物売って何とか生活しましたが、ついには一枚のふとんだけになりました。やがて冷たい家主は家賃の代わりにそのふとんをうばい、追い出された家の軒先で、二人は抱き合いながら眠ってしまったのです。

「にいさん寒かろう」「おまえ寒かろう」。

八才と六才の幼い兄弟が何度もくり返すこの会話が頭からはなれません。食べる物がなく、守ってくれる大人もない苦しいかんきょうの中で、必死に生き抜こうとする二人の姿は、切ないものがあり、怖いどころか悲しくなりました。私にも六才の弟がいいますが、こんな風にお互いを思いやることができるだろうかと考えました。

大雪がふる冬の季節に、一枚のふとんしかなかった二人は、どんなに寒かったことでしょう。いつ死ぬか分からない状況の中でさえ、相手を思いやる二人の姿は、どんな困なんな状況でも相手を思いやる気持ちの大切さという小泉八雲のメッセージがこめられていると感じました。これは、新型コロナウイルスがこめられている今の時代にも通じるメッセージだと思います。苦しいけれど、相手を思いやる気持ちを忘れなければ、何とかのりこえていくはずですよ。

しかし、私は一つ、とても不思議に思うことができました。「にいさん寒かろう」「おまえ寒かろう」という対話は、なぜいつも弟からなのだろう。相手を思いやる優しい兄弟なので、時には兄から弟に声をかけてもいいのではないだろうか。私はそのことを考えながら、くり返し、この話を読みました。

そこで、気が付いたのです。このお兄さんは、一枚のふとんのほとんどの弟にかけてあげていたのではないだろうか。それで、弟はここへ来る兄を心配して、いつも自分から声をかけていたのかもしれない。

ません。本当のところは分かりませんが、こう考えると、より深い二人の兄弟愛がうかび上がります。

このように小泉八雲の怪談には、今の時代にも通じる深いメッセージがこめられていると思います。私はこれから生きていく中で、さまざまな困なんに直面するかもしれませんが、そんな時は、小泉八雲からのメッセージに耳をかたむけて、思いやりの心を忘れず、力強く生きていきたいです。小泉八雲の怪談に出会えて良かったです。

講評

今年の応募作品は五点だった。応募が少なかったのは残念であるが、応募された作品はそれぞれに味わいがあり、興味深かった。

最優秀作品は「鳥取のふとんの話」を深く読み取り、兄弟愛についてしっかり考察している点が素晴らしいかった。特に「なぜ、いつも弟からの呼びかけなのか」と考えを深めていたところがよかった。また、「怪談の向こう側」は物語を楽しみながら読み進めつつも、「怪談はこわいだけではない」という気づきがあり、好感の持てる作品だった。

コロナ禍が続いており、応募数が減ったのかもしれない。次年度は、より多くの作品が応募されることを期待したい。

(講評者 丹羽 隆)

中学生の部

〈優秀賞〉

八雲と草ひばりがかかえた

孤独で美しい世界

「草ひばり」を読んで

神奈川県横浜市 内田 博仁

僕はずっと暗がりの中にいた。僕は自閉症という病気を患っていて話すことができない。しかしその閉ざされた心の中で僕はずっと言葉をついでいた。それは言葉というより歌う詩のようであり、僕は暗闇の中に美しい歌の音が響く輝く世界を持っていた。

僕は母に勧められ小泉八雲の草ひばりを読み、小さな狭い籠で美しい歌を音色を響かせ、孤独の世界から夢の理想の世界へと飛び出そうとしていた草ひばりに自分を重ね、涙が出るくらいに胸を打たれた。孤独な草ひばりの生きることへのいや自由への叫びとそれに自身の孤独な状況を重ね（八雲は両親からの愛を受けることなく育ち、転々とし不遇な半生であった）同調し、まるでそこに自分の姿を見るかのように心酔する八雲の姿にさらに僕も同調し草ひばりの魅力の虜になったからだ。

さてこの話は八雲がふとしたきっかけで草ひばりと呼ぶ小さな虫

を飼うことになり、この虫から大きな感銘を受ける物語だ。八雲の草ひばりの音色の描写は驚くぐらい繊細できめ細やかな観察眼を持つ。

— いつも日が暮れると、この微小の魂は目をさます。すると、部屋中、名伏しがたい妙なる美しい音楽 —

僕はこの描写にうっとりとして酔いしれた。秋の静かな夜に、まるで愛する人を慕うかのように切なく歌う草ひばりの音色。狭い籠の世界からまるで美しい自由な恋をしてるかのように歌うその姿に、僕は自分の幼少期を重ねずにはいられなかった。僕も閉ざされた世界でいつも言葉を紡ぎ詩を歌い、その空想の世界で慰められていたからだ。僕は読みながらいつの間にか草ひばりを見つめる八雲と時空を超え共鳴して、うっとりとその草ひばりの音色に酔いしれたのだ。

懸命に生きようとし、まだ知らぬ恋に憧れる草ひばりに夢中になったところで、この物語は劇的な結末を迎える。女中が餌を与え忘れ虫が死んでしまうのだ。僕は八雲と同様に衝撃を受けた。狭い世界で利他的な状況の中で、それでも健気に一生懸命に毎夜愛するものを想い美しく鳴く草ひばりに、八雲もそして僕自身もその姿に自分を重ね、まるで自身の生きる道を閉ざされた気持ちになったからだ。最後餌がない中自分の足を食べてまで生きようとした草ひばり。死ぬ前日まで同胞の魂を伝統にのせて美しく切なく最後まで歌い続けた草ひばり。僕はそこに現実の人生が見えるような気がした。どんな情熱的な恋も人生も必ず終わりはくる。命とはなんて儚いものなのだろうか。

八雲は最後こう綴っている。飢えのあまり己の足を食うことは、歌の才を授かったものにとつては最悪な出来事ではあるまい。歌う為に自分の心まで食わなければならない人の形をしたこおろぎさえているのである。人の形をしたこおろぎとはこの世に生きる人間のことだろう。自分の心を食いながら自分を殺しながら生きる人間より、自由な美しい世界をもつ不自由な僕らの方が幸せなのではないかと。そんな風に思わせてくれる衝撃的な言葉で締められているのだ。人生は時に残酷で猥雑で辛いものである。でも心の中、精神は決して汚されることはない。驚くほど無垢で真っ直ぐな美しい世界を魂を持てるのだ。草ひばりや八雲のような孤独な魂を心を持つ人こそ美しい芸術的な世界を内面に持つのだ。この草ひばりを読み僕の人生活は変わった。僕の心にある孤独、苦悩いやそれ以上に情熱、愛、そう僕にも表現したいことがたくさんある。僕も生きていく限り精一杯与えられたこの道を生きようと思えたのだ。八雲から八雲が見つめた草ひばりの魂が僕の心に歌として言葉として伝えてくれたのだ。孤独だからこそ優しく美しい芸術を生みだせるのだと。人を愛しすべてのものを愛しみ優しい思いで世の中を見れば、私達にしか分からない美しい世界を心の中に持てるではないかと。僕は八雲の文章や草ひばりを見つめる思いから、そんなメッセージを受け取った。僕は話せないこの運命を宿命を真っ直ぐ受けとめ自分を憐れむのではなく僕の紡いできた言葉、苦しみから生まれた強さ、優しさをむしろ誇りにして生きていきたいと思えたのだ。こんな一中学生の僕が恐縮ではあるが僕のこの小さな世界と八雲の世界

講評

に何か同一のものを感じ僕は慰められ勇気をもらったのだ。人より不幸だと思っていたけれど僕も心は自由ではないか。こんな素晴らしい言葉や世界を持つてるではないか。僕もずっと歌い続けたい言葉をつめた世界を読み追い続けたい。八雲の持つ精神、強さを日々受け取りたい。八雲に愛され見守られ、最後まで死をも恐れず輝き歌い続けた草ひばりのように。

中学生の応募は五点であった。数は少ないもののただあらずじを追うのではなく、登場人物をよりリアルな存在として捉えようと読み深めているものがあつた。作品を通して人間を多面的に捉えようとしているところに中学生として解釈に対する成長を感じた。

優秀賞は、自分自身と「草ひばり」を重ね合わせて、独特の世界観を作り上げ、考えを深めている。閉ざされた心の中で言葉を紡いでいた「僕」は、「草ひばり」の音色の描写に、八雲の繊細さを感じ取っていた。こうした感性の鋭さもあつて、作品を通して「僕」がかつてないほどの読書体験をしたことを、こんなに豊かな表現力で綴っていることに驚かされた。

（講評者 石原 康博）

高校生の部

〈優秀賞〉

雪解けに込められた小泉八雲の想い

東京都調布市 若林 未華

雪女は、美しくも悲しい幻想的な物語だ。普通の人になりたい。普通の人間として、巳之吉と恋をしたい。なぜ雪女が巳之吉に自分が雪女であるということを明かすと言ったのか、その疑問に対する答えとして考えられるのは、雪女のそんな感情だった。雪女は、自身の存在価値を感じていなかったのではないか。なぜ存在しているのか、生きているのか、その意味が分からないまま日々生活を送っていたように思える。そこには、感情があまりなかったのではないだろうか。私は、この雪女の状態が小中学生の時の自分に似通ったものがあると感じた。私は小学生の時に起きた出来事により、中学生になってからもそれがトラウマとして残った。人と接する時、希望を持つては碎かれの繰り返しで、最初に感じていた感情は徐々に霧散していった。雪女を読む限りでは彼女の過去は想像する他ないが、私は彼女が非人間であるがために普通になりたいのになれないという呪縛に縛られていたように感じた。

そんな中、雪女は巳之吉と出会う。雪女の存在意義は、巳之吉という好きな人と過ごすことになったのではないだろうか。彼女は、

素の自分を受け入れてくれる人を探していたように感じられる。その時の雪女の感情は、自分でもどうしたらいいのか分らないというものだったのではないか。最初は理想像になれると純粹に信じて試行錯誤していても、何回も失敗すると自分に失望し自分の行動や考え方に自信が持てなくなる。信じていたというよりも、きつとそうなれるとすぐる気持ちと言った方が正しいのか。彼女は、雪女としての感情を希薄化され自己から遠のく我を見ていたのかもしれない。そして、この感情は古今東西人間が抱え続けてきたものである。雪女は、そんな悩める人間の象徴である。

雪女には、もう一度転機が訪れる。巳之吉に裏切られるのだ。信頼していた人に裏切られるというのは、やっと見つけた居場所が雪に解けるように、儚く散りゆくことだ。人は裏切られたとき、それまでのその人との思い出が嘘のように思えて、大切なものを失ったような気持ちになる。しかし、それが全て虚構だったのかというとそうではない。むしろ、それも全て真実だったのだ。虚構と真実、裏切りと信頼。裏切りと信頼は紙一重であるが、人は信頼関係があることで自らの居場所を構築できる。小泉八雲は西洋人であり、そこからイギリス、アイルランド、フランス、アメリカ、マルティニーク島など様々な地域を経て日本の松江市に落ち着いた。この各国を回った経験により、自身は仏教徒ではなくとも真剣に祈りを捧げる人々の姿を美しいと思う審美眼を育て、それが当時の日本人たちにも強く伝わったのだろう。彼は地域の人々の信頼を得て、講師をすることになる。子供を預ける親、教員仲間、周囲の目、どれをとっても信

頼がないことには教育に携われない。小泉八雲は、地域の信頼を得られたところが誇りだったのであろう。やはり、小泉八雲がテーマとして強調したかったのは、真実と信頼であると思ふ。虚構と裏切りだけを残して、何が残るというのか。真実と信頼を強調するために、虚構と裏切りという対極のものを物語内で目立たせたのだろう。私たち人間にとって、信頼の根本的な定義とは何であろうか。それは、今までヴェールを被った状態で理想形として見ていたその人を、ヴェールを外した状態で直視し、ありのままのその人を受け入れることだと思ふ。まるで、雪解けが起きるように。そしてその人も自分のことをその状態で見て受け入れてくれた時、信頼関係が成立し真の居場所が作られるのではないか。それは、季節が冬から春に移り雪が解けると似ている。雪解け水の、なんと澄んだことか。

現代ではネットワークも普及し、自分を取り繕いやすい環境となった。雪解けが起きるのが難しくなったと感じる。そんな時には、小泉八雲の雪女を読んでほしい。私は、人を信じることは相手に期待し求めることであると同時に、求めたことが返ってこなかった時に、それもその人だったのだと受け入れることもあると思ふ。一皮はがれたその人を受け入れられた時、本当に信じたと言えるのではないか。そして、人から信頼を得るには小泉八雲がそうしたように、相手のことを理解し受け入れることから始まると思ふ。またそれと同時に、自分自身のことを見つめなおし失敗を改善していくことで、周りの人からの信頼が積み重なり、人徳のある人に成長していけるのだと思ふ。

〈優良賞〉

小泉八雲の怪談

山口県熊毛郡 上岡 京史

私は怖い話が苦手だ。ホラー映画はもちろん、心霊スポットや子供向けの怖い話ですら苦手だ。小泉八雲、彼の作品は怪談であり私を怖がらせた。私は彼のように怖い話を書く人の気持ちが全く分からない。そこで小泉八雲の生涯を見ていくことで怖い話を書く人の心理を理解しようと考えた。

そして何冊かの彼の作品と生涯の本を読み終えたとき、私は彼がなぜ怖い話を書いたのか、その答えは生涯に関わっていると気づいた。

まず、彼の人生は不幸な旅であった。父母が離婚し父に引き取られるも成人前に亡くし、育ての大叔母の破産を受ける。その人生にともなってギリシャ、アイルランド、イギリス、シンシナティー、ニューオーリンズ、マルティニーク、そして日本と移住を何度も繰り返し返してきた。移住するときの気持ちを考えてみる。きっと新天地への不安感、期待感、そして慣れない土地でのストレス。そういった感情が彼に押し寄せただろう。

次に彼は、十六歳で左目を負傷し失明してしまっている。私はその史実を知り、自分の片目をタオルで巻き、片目の見えない状態を体験してみた。物凄く怖かった。片目が見えないだけで方向感覚が

狂ったようにまっすぐ歩けないし、よく見えない。彼はこのような状態で三十八年間いた計算になる。見えないもの、不思議なものの恐怖はもしかすると彼が一番よく知っていたのかもしれない。

そのような人生の中、彼は日本に来て感動したという。まず、人が海外に比べて優しい。そして親切であると彼は感じた。さらに彼は日本人の神への信仰に強く惹かれた。彼が生涯において活動の本拠地としていた島根県には出雲大社がある。彼はそこに行き、こう思う。「なんて愉快な、不思議な国だろう。ここでは何でも許されるのではないか。生前は極悪人でも、その人が死ぬとホトケとなって拜まれる。キリスト教では神はひとつで、与えられた神との契約を果たすことが人の道である。生まれながらにして原罪を背負い、神のために奉仕し、自我を悔い改めなければ天国に行けない。しかし、この国の国民は八百万の神のもとで、人生の豊かさを享受している。」と。日本では当たり前であるこの考え方は、彼の罪意識、自我を殺して人に接してきた今までの人生から救い出してくれたのだろう。

移住によるストレス、片目が見えない恐怖、そして今までの人生から救い出してくれた日本の文化。この三つが彼の怪談話の根幹にあるのだろうと私は思う。

例えば彼の作品の一つである「耳なし芳一」を取り上げてみる。その作品には、鬼火となって姿を表し、最終的には芳一を八つ裂きにしてしまおうと考えている読み手に「死への不安」を与える平家の亡霊。目の見えない真つぐな青年、芳一。そして、芳一に

琵琶を自分のために弾いてくれるだけで食事と宿を提供するだけでなく、芳一が平家の亡霊に取り込まれようとされていることに気づき、体中（耳は忘れてしまったが）に護符を書いて守ろうとしてくれた和尚。以上の不安感・盲目・人の優しさという彼が生涯において実際に体験した三つのものが隠されている。

しかし、その三つだけならば怪談話を書いていないかもしれない。なぜならこの三つには幽霊や妖怪といった霊的存在がほとんど絡んでいないからである。ではなぜ彼は話の中に霊的存在を組み込んだのだろう。

その答えはきつと日本の文化が関係していると私は思う。例えばお盆。お盆におこなわれる盆踊り、彼は「盆踊りに魅入られつつ、内心小躍りした」とある。そして「これこそ自分が求めてきた世界ではなかったか。」と思ったのである。霊を重んじて、人が死んだ後も向かい入れる日本の文化。この文化が彼の怪談話の背景にあるのではないだろうか。

私も日本の霊を重んじる文化には感嘆する。祖父母の家に行くとき、ホトケ様にお祈りしてきなさいと祖母によく言われる。理由を聞くと亡くなった祖先が私たちを見守ってくれているからその方たちを恥じないようにとのことだった。そうすることで私の人生が正しい方向に進み亡くなった後も天に行けるといふ。科学的根拠はないがきつとその考え方は、人生において心の支えとなるだろう。

小泉八雲の生涯について紐解いて来たが、このような生涯があったなら、彼が怪談話を書くことも理解できる。彼の作品を読み、多

くの人が恐怖の感情を抱いてきたが、一番読んで恐怖を感じていたのは彼自身ではないだろうか。ひよっとするとホラー映画や地方に伝わる怖い話を書いた人の人生には、書かざるを得ない事情があるのかもしれない。

私はやはり怖い話が苦手だ。八雲の思いは少し理解することができたが、やはり怖いものは怖い。ただ、これから私は、怖い話をただの怖い話と割り切るのではなく、作者の意図も考えて怖がろうと思う。そのことを思わせる小泉八雲の人生は彼史上、最長かつ最大の怪談話なのかもしれない。

《佳作》

Hi-mawari

京都府京都市 秋 山 あかね

家の裏の森になった丘の上で、ロバートとぼくは妖精の輪を探している。
フェアリー・リング

『耳なし芳一』や『雪女』で知られる小泉八雲の『怪談』に、『ひまわり』と題された物語がある。この文章は、その冒頭である。

読書が好きな私が小泉八雲の小説に出会ったのは、小学生の頃だった。『耳なし芳一』や『雪女』の、読み進めるほどに背筋を這

い上がつてくる恐さ。『稲むらの火』の、津波への教訓。小泉八雲の本名がラフカディオ・ハーンといい、彼が日本人ではないと知った時、とても驚いたのを覚えている。そして疑問に思ったのだ、なぜ彼は「日本の昔話」を書くのだろうか？

今冬、高校生になった私は偶然にも一冊の本を手にとった。『ケルトを知るための65章』。世界史のレポート課題でケルト美術を取り上げようと考え、借りてきた本だった。そこで私は長年の疑問の答えにたどり着いたのだ。小泉八雲は少年時代をアイルランドで過ごしており、その時に耳にしたケルトの妖精譚や怪談を日本の「鬼」の物語に重ね合わせたという。

『ひまわり』は、そのような小泉八雲の原動力が示された物語なのではないかと思う。初めて読んだ時、私はこの作品が『怪談』に含まれていることに違和感を覚えすにはいられなかった。前述したような、『ひまわり』の冒頭に見られるように、日本が舞台で日本人ばかりが登場人物、という『怪談』の中にあって、『ひまわり』は日本人以外が登場人物であるし、読み進めていくと舞台がウェールズであることも分かる。ではなぜこの作品を『怪談』の中に収めたのかと言え、やはり作者自身が日本という異国の物語を書くことになった、きっかけを表しているのだと思うのだ。

Believe me, if all those endearing young charms, Which I gaze on so fondly to-day.....

フェアリー！リンズ
妖精の輪を探していたロバートと「ぼく」は、ハーブ弾きに出会う。演奏に対して心中散々に酷評していた「ぼく」は、*superb*という言葉に心をゆさぶられる。ハーブ弾きがこの一言にのせた「優しいふるえる声」が、「ぼく」に見えない恐怖を感じさせたのだ。話の舞台は違っても、じわり、じわりと感じる「怖さ」に、『怪談』に収められた共通点がうかがえる。

物語はその後、四十年後の「ぼく」にスポットライトを当てる。日本でひまわりを目にした「ぼく」は、遠い昔のハーブ弾きの歌声と、今は亡きロバートを思い出す。

お日様が沈むとき、ひまわりの花は彼女が神とも慕うお日様に顔を向ける、

それはお日様が昇ったとき、彼女が向けたと同じ顔つきだった……。

ハーブ弾きが歌ったsunflowerの名と同じ由来を持つ、日本のひまわり。共に回想される金色の捲毛まげのロバート。小泉八雲があえてこの作品を『Sunflower』ではなく『Himawari』と題したのも、故郷と日本を重ねあわせた、自らの執筆活動の原点を、この作品に表していたからなのだろうと私は思う。

例年「怪談」が人気なのですが、今年は上位作品はすべて「怪談」からになりました。「雪解けに込められた小泉八雲の想い」は自分自身の体験と「雪女」の境遇を重ね合わせて論考している点がユニークです。仮説の上に仮説を重ねたことで論の飛躍がありますが、それ以上に魅力的な文章でした。

「小泉八雲の怪談」は八雲はなぜ「怪談」を書くにいたったのかという点を八雲の生涯に照らし合わせて、怖いもの見たさの人生とはどのようなものかと筆者なりに考察をしています。「Hi-mawari」は怪談の最後に添えられたエッセイの一つ。なぜ「怪談」の最後がエッセイでそれもアイルランドの思い出なのか、という違和感を分析しながら日本の怪談とケルトの世界を行き来します。あらずじに字数を多く使ったのが惜しまれました。

（講評者 高嶋 敏展）

一般の部

〈優秀賞〉

言葉の力

熊本県熊本市 貴 田 雄 介

「約束が破られたことによつて起きた災い」というテーマが私の心に深く迫ってきた。これは「古事記」以来描かれ続けてきたきわめて日本的なテーマだろう。

妻は男を愛していた。彼女は彼の武家の跡取りとしての立場も理解していた。彼女は私の感情と公の立場の間で苦悶した結果、自分の死後、男が後妻を娶ることの心配を男に打ち明けた。

男も妻を愛していたため即座に後妻を娶らないと約束した。彼女はその言葉を信じる。

妻の死後彼はこの約束を守ろうとするがすぐに破ってしまう。

彼もまた、私と公の間に挟まれ公の力に屈してしまう。

当時の日本社会は、自己よりも家や世間の力が強かった。彼と彼女の間の約束や彼の考えなどは家や世間の前に無力化されてしまった。

その後、男は若い娘を後妻に迎える。

男が後妻をもらうことに簡単に応じてしまうのは、女を単に後継を残すための道具として捉えているという感覚の反映だとも読み取

れる。男の親戚たちにとっては、男の妻は誰でも良かったかもしれない。明治以前の日本に生きた多くの人の考え方もこの感覚と大差なかったかもしれない。

しかし、前妻は、男と女がお互いをかけがえのない存在として愛し合うという在り方を信じた。彼女は自身の全存在を賭けて武家や、世間に抵抗した。その抵抗の証が生前に結んだ約束だった。

彼女のおもいは八雲やセツさんの本心でもあっただろう。

男に約束を破らせたのは世間の力だ。前妻は、男と男の背後にある世間を罰するために蘇る。

蘇る彼女の姿を目の当たりにして、彼女は彼女で約束に拘束されたようにも見えた。誰が好き好んで死後に蘇りたいと思うだろうか。自分の身から出た言葉が、死後も自分の体を動かし約束を果たさせた。そのように感じられた。

おそるべし言葉の力である。

彼女の死体は後妻に婚姻を解消するように迫る。ここで、婚姻という過ちを取り消しさえすればその他のことには頓着しないというドライさが好きだ。これは彼女の死体は男に自分の元に帰って来てほしいという一念で存在しているということだろう。そこがこの話の重要な点の一つだった。

それに対して、後妻は素直に反応し婚姻を考え直し離縁しようとする。しかし、婚姻は男と二人で決めたことだから自分一人では決められないと律儀に男に相談する。

後妻からの相談に対して男は、ことごとくこの状況への対応を誤

る。すぐに後妻を離縁すればその後の惨事は防げたかもしれない。

しかし、一度目の彼女の訴えをなおざりに宥めて過ごし、二度目の訴えに対して、彼女に警護の者達を付けることで済ませる。

この男の対応から彼が前妻との約束を軽視したことが透けて見えた。

ここで彼が犯した失敗は、目の前の非現実的な事態にあくまでも現実的な対応、この世で起こりうる範囲のことではしか対処しなかったことだ。

生前の妻に対してなら、この警護の者たちで対応が出来ただろう。しかし、死後の妻という超自然のものに対してはどんなに力に勝る警護も太刀打ちできない。

前妻は蘇り後妻を殺めることで男を裁く。

破られた約束は、破られたままにしてはならない。誰かが約束が破られた報いを受けなければならない。そこに至って日本神話始まって以来の約束の強さが担保される。

女は、男と前妻との間の約束は知らなかったから後妻が殺されたことは苛烈過ぎるとも感じられた。しかし、この一見度が過ぎていくようにも感じられる処置には以下の三つの意味が含まれている。

一点目は、後妻の人格を認めるからこその処置だということ。

二点目は、前妻が約束を破ってもなお男を愛していたということ。

三点目は、女が生贄に捧げられることの意味を読者に問うているということ。

一点目について、女を家に従属するものとして女に人格が与えら

れなければ後妻を裁くという感覚は生じないだろう。女を一人の人間として認めるからこそ罰することができる。

二点目について、前妻は男が約束を破ってもなお彼を愛していた。男を生かすことで男が彼女の元に戻るように考え直すチャンスを与えた。

三点目について、女が生贄に捧げられる話は日本の古来の物語にも多くある。物語の中で男が殺されなかったことは、逆に言えば死なせてもらえなかったことを意味している。男はこの物語の中では結局最後まで許されない。

ここである男とは男性中心の考え方で作られた当時の日本社会を意味している。そして、そういう社会は現在も変わらずに存続している。

男が許される可能性があるとすれば、この物語を読んだ読者がこの物語の続きにある今の世界をどう生きるか？にかかっている。

八雲とセツさんは言葉の力を信じていただろう。そして、「破られた約束」の前妻に託してこの物語を語った。

「破られた約束」をどう受け止め、どういう未来を作るかは私たち読者に託されている。

〈優良賞〉

僧になった男

埼玉県狭山市 長 澤 真 理

その話の載った本を私は探していた。前にパンフレットか何かで読んだ小泉八雲の短い話が忘れられず、もう一度読みたかったのだ。けれど、題も分からず、ネットで八雲の怪談や奇談を集めた本を調べたり図書館の本を検索したりしても、それらしいものはなかなか見つからない。

あきらめかけて、ある日夕食の時、「生まれた子どもを殺す男の話が見つからないのよね」と話した。すると息子が、「それって、紀行文みたいなのの中にあつたんじゃないかな」と文庫本を持って来てくれた。あつた。

それは、「日本海の浜辺で」という作品の中にあつた。旅の途中で従者から聞いた話という形で納められている、たった一ページ余りの短い話だ。

百姓が、生まれてきた子どもを次々に川に捨てて殺していく。貧しくて育てられないからだ。しかし、その後少し豊かになった時生まれてきた七番目の息子は、殺さずに育てることにした。自分たちの老後の面倒を見てもらいたいといういわば功利的な目的もあって子供を残したのだ。

この子を育てるうちに男の心が変化してくる。だんだんその子ど

もがかわいくなってきた。「かたくなな百姓」は「自分の心根の変化に驚き」を覚えた。毎日子どもを見ているうちに、意図も計算もなくいとおしいという気持ちがいってきたのだ。それまで自分の心を顧みることのほとんどなかった百姓は、それに戸惑っている。

男の心の動きについて述べられるのは、これが初めてだ。それまでは、男の心には何も触れられていない。生まれた子どもを殺す時も、何を感じたのか感じなかったのか、そんなことは何も書かれない。ただ「川に流してしまった」とあるだけだ。

男は、昔話の中の「貧しい百姓」として登場し、貧しいので子どもを殺すという物語の中の役割を果たすだけだ。しかし、ここで初めて、この男は人間として立ち上がってくる。

昔話の聞き書きという体裁を取った話も、聞いたまま書いたものではないということがはっきりと分かるのもここだ。語り伝えられた昔話にこのような自分の心への内省が入っているはずはない。八雲自身の作家としての目を書かせた文に違いない。

こうして男が人間としての輪郭を見せた時、決定的なことが起こる。

あるきれいな月夜に、男は五か月になった子どもを抱いて庭に出て「いい月だ」と言う。男の心は平安と愛情に満ちていただろう。すると男の胸に抱かれた赤ん坊は、男を見上げる。そして大人の口調で「前に私を捨てた時もこんな月夜だったね」と言うのだ。ただ静かな大人っぽい声で。書かれてはいないが、子どもの美しい大きな目がぱちりと開かれて男を見たであろう。

場面が穏やかな美しい月夜であり、男が人間としての温か味を獲得してきつつあっただけに、この子どもの豹変は不意打ちで、物語を読む者も男とともに衝撃を受けずにはいられない。

この瞬間、時間が止まってしまふ。きれいな月の夜の庭は凍りつく。

しかし、それ以上何かが起きるわけではない。子どもはすぐ元の赤ん坊に戻って、何も言わない。非難もしない。さっきの、男を見つめたであろう目は、もうあどけない赤ん坊のものになり、大人の口調は失われてしまった。次の日には、子どもは元のかわいい美しい赤ん坊であったことだろう。しかし、男にとってはこれで十分だった。十分過ぎた。

月夜の子どもは「私を捨てた」ということで、今男が抱いていて、抑えがたく愛情を持つてしまった子どもと今まで川に捨てられた子どもは同じなのだということを宣言している。月夜に子どもの口から発せられた言葉は、男に自分のしてきたことを突きつける。

世界は変わってしまった。男はもう、恐れと痛み無しに子どものかわい顔を見ることができない。今までと同じように、日常を送ることは不可能になってしまった。

そして、最後の一行だ。八雲は子どもや男がどうなったかを何も詳しくは書かず、ただ、この一行を置く。

「百姓は僧になった」

なんとという幕切れか。後悔、慟哭、痛惜、そうしたどんな言葉でも言い尽くせないものが、この一行に詰まっている。そして、かす

かな救済の可能性もまた感じられる。だからこそ、恐ろしい話でありながら、この世ならぬ美しさを持っているのではないだろうか。あの月夜のように。

ジャーナリストでもあった八雲の、過剰な修飾を排した簡潔な文章は、胸の奥に打ち込まれ、無限の意味を讀者自身に考えさせる。この最後の文で、この話は私にとって忘れ難いものになった。

〈佳作〉

小泉八雲の見た日本女性

「ある女の日記」より

島根県出雲市 山田敏子

小泉八雲は来日後、英語教師として奉職した。松江を皮切りに、五高（現・熊本大学）、東京帝大と転動する。余談だが、五高も帝大もその後任は十七歳年下の、後の文豪夏目漱石だった。帝大に勤務する頃には、「ヘルン先生」と慕われ、世界的名声を得ていたという。その好例として、住友常設理事にして、佐々木信綱門下の歌人で歌会始の選者を務めた川田順は、ヘルン先生を慕うあまり、後任の夏目漱石（当時はまだ無名だが）に教えを受けることを拒み、ヘルン先生のいない文科から法科に転じたという。おそらく八雲の日本に向けるやさしさや尊敬の念に接して、人間としての魅力は大

いに感じていたのだと推察する。

「骨董」（明治三十五年刊）収録「ある女の日記より」を讀した。そこにあるのは、主人公だけでなく日本女性全体に対しての、八雲の向けるやさしいまなざしだ。もう百年以上前の明治というまだ貧しい時代を、東京の片隅で生き、恵まれていたとはいえない平凡な市井女性の短い結婚生活が「むかしばなし」という表題の、日記形態の短い文章に凝縮して描かれていたという。この女性が実際に存在していたのか、それとも風聞を元に創作された人物なのかは分からない。ただ、多分こういう人生を送った女性は、当時沢山いたのだろうという気がする。

明治維新前後に東京の下町で生まれたと思われるこの女性は、二十歳前後で嫁ぐのが当たり前の時代に、二十九歳にもなって「行かず後家」状態にあった。決して美人とは言えないその女性は、やつとあった縁談（相手は子供のない再婚）に応じ、数日後に嫁ぐ。「ゲゲの女房」に描かれた結婚エピソードと同質だ。昭和の半ばになってさえ、三十歳に近い未婚女性は「エイッ」とばかりそこにある縁談に飛び込むしかなかった。この女性がすぐに縁談を受けることには、見合い制度がなかった西洋人の目から見たら特異なことだろうし、現代の日本女性にとっては違和感しかないだろう。

少し前までは結婚は「永久就職」と呼ばれていた。私が適齢期と言われた時期には、すでに電化されている家で、主婦業だけをするというのは、安定していて楽な選択と思われる。しかしそれ以前の電化されない時代は、家庭内での衣食を賄うのはひとえに主婦

の腕にかかっていたのだから、主婦の力量の差は絶大だ。自分の居場所と仕事を求める為に結婚は必要なことで、まさに永久就職だったのだろう。

それだけに人生五十年の時代に、三十歳近くまで実家にいるのは、今で言うニートに近いことで恥だったのだろう。だからこそ、この縁談に飛びつくように嫁いだのだ。嫁いだ家は狭い二間で、屋内には江戸時代の長屋と変わらず台所がなく、暑かろうが寒かろうが、屋外で多分七輪で煮炊きし、井戸水で炊事と洗濯をする。屋内で家族の縫い物をし、厳冬でも昼間は火を使わず、時間があれば、煙草を紙で巻く内職に励む。今の主婦のように、三食昼寝付きではいられない。家事には手間がかかり、男性の一人暮らしは困難で、主婦が必須の存在だ。主人公の夫も、先妻が亡くなってすぐに彼女と再婚するのである。

結婚したあと、ささやかでも実家やきょうだいとも冠婚葬祭等で付き合い、そのためには普段はごく質素な生活を送る。ほとんど人格を知らずに結婚した夫とも次第に馴染んで、神社等の祭礼に行ったり小芝居を楽しんだりする小さい幸せもあった。しかし子供が三人生まれるのだが、三人とも乳児のうちに夭逝するという悲劇に遭遇する。特に三番目は夫が待ち望んでいた男の子だったのに、彼女自身も妊娠中毒なのか、他の慢性病に罹患しているのか、徐々に体調を崩し、いわゆる産後の肥立ちが悪く、赤ん坊の死亡後、後を追うように彼女も結婚五年、三十代前半で死去する。

今の時代から見ると、本当に貧しく儚い人生だが、その日その日

に希望を見出し、小さい幸せを追い求め、自分に運がないのは前世の因縁と、決して恨むこともない。時に諦めつつ、けなげに日々を生き抜いた。人の死も今より身近にあり、その意味では、今の日本人より、達観した心理状態であったのかもしれない。

そんな日本女性は、八雲が理想とし、憧憬する女性の生き方であったのかもしれない。それは八雲の決して幸せでなかった子供時代と、別れた母への思いがあったのだろう。

江戸時代から、明治にかけて三十代女性は出産に伴っての死亡が大変に多かったと聞く。女性にとって生き辛い時代を、けなげに生きた女性の姿が浮かんでくる。ちなみに彼女が亡くなった頃、夫の祖母は十六才で嫁ぎ、十人からの子供を産み、子供の行状に振り回されながらも運に恵まれて、九十七歳で亡くなったという。どちらの女性も尊敬に値する明治の女性の人生であった。

〈佳作〉

怪談・奇談における「出会いと別れ」

～小泉八雲集における救い～

佐賀県唐津市 松本航平

小泉八雲といえば、日本に帰化し日本の文化・風俗を海外に発信した作家として知られている。私は今回、初めて八雲の作品に触れたが、八雲の作品を読むまで、怪談や奇談といえば、怖くて悲しそうなイメージが先行していた。恐らく、怖い話＝怪談・奇談という先入観は、一般的な感覚においても多分に存在するように感じる。しかし、八雲の怪談・奇談には、そのようなイメージだけでは語れない作品情緒や物語構造の多彩さが兼ね備えられており、驚きと発見の連続であった。

「出会いと別れ」。小泉八雲の怪談・奇談の本質は、この表現方法にある。「出会いと別れ」というと、小説に限らず、ドラマや映画、漫画からアニメに至るまで、作品に構造という明確な枠組みを与え、流動的なエネルギーで物語を動かす典型的な手法であり要素の一つである。

八雲作品の多くは「物語の中心人物が何か（幽霊・妖怪・死者等）に出会い、別れることによっておこる変化（結末）」というプロットの中で構成される。『幽霊滝の伝説』、『鮫人の恩返し』、『梅津忠兵衛のはなし』等の作品は、この最たる例であり、有名な『耳

なし芳一のはなし』もこれにあたる。物語の変化（結末）は様々であるが、『幽霊滝の伝説』のように、我が子の喪失という恐怖を感じさせる作品もあれば、『耳なし芳一のはなし』のように、耳の喪失という同じ変化であっても、読者に寄り添うような哀愁を含む例もある。八雲作品の趣深い所は、この規律的枠組みを用いた繊細且つ多彩な物語情緒の組み合わせである。

例えば、八雲はこの枠組みを用い、読者の理性や物語の時間的な側面に影響を与えている。『和解』、『守られた約束』、『破られた約束』、『蠅のはなし』等は、一見すると前述した作品同様「出会いと別れ」の物語であるように思われるが、物語冒頭に何かしらの「別れ（死別・離縁・別離等）」が描かれ、再会という形で「出会い」が描かれる。現代の感覚において、「再会」というのは、「感動・偶然・奇跡」などの修辞を用い表現され、優しさや温もりといった情景が付随する。八雲作品の中にも、そのような結末を迎える『守られた約束』や『蠅のはなし』といった作品がある一方で、『和解』や『破られた約束』のように、恨みや嫉妬に起因して再会を果たすパターンも多く存在する。後者の方は、一般的な怖い話＝怪談・奇談というイメージの典型例ではあるが、前者はどこか救いのある「別れ」になっており、善悪両方の感情を感じる仕組みになっている。また、「出会いと別れ」という枠組みだけでは、原則、現在から始まる進行形の物語が主であるが、物語冒頭に「別れ」を描くことにより、作品に過去という時間軸が設定され、物語の時間という奥行きが加わっているように感じる。その為、嫉妬や恨みに起因

する出会い（再会）の描写に、より説得力が加わり、物語の結末において多様性が生ずる要因になっているような印象を受ける。そして、このような構造の中で、八雲の怪談・奇談は、恐ろしい結末や悲しい別れで終わる場合もある一方で、それと同じくらしい救いが描かれているようにも感じられた。

『耳なし芳一のはなし』と並ぶ八雲の代表作『雪おんな』は、秘密を守らず口外してしまったものの、子供の存在があったため殺されない。という一種、戒めのような救いが描かれている。また『死霊』や『雉子のはなし』、『常識』等は、悪を懲らしめるといふ、勸善懲惡に近い、日本の伝統的な正義が描かれ、『乳母ざくら』、『食人鬼』、『葬られた秘密』は、別れの対象である死者や魂などが、直接的に救われる物語である。八雲の怪談・奇談の多くの作品には、このような、「別れ」を通じて描かれる「救い」という変化が印象的に描かれる。そして、その多くは、寺社や仏などが配置される空間、念仏や経という行為、御坊や和尚のような存在等の日本の文化や「救い」の象徴的要素によって構成されているものが多い。したがって、八雲の怪談・奇談作品は、「出会いと別れ」を通じて、描きだされる救済の文学とも言えるかもしれない。そう思うと、私は怖い話＝怪談とはもうとても思えなくなってしまった。そして、もし仮に八雲が作品に「救い」という意図を込めていたとするなら、なぜ「救い」を描いたのか、そして、なぜそれを怪談・奇談として描いたのか。私は、読後そう感じざるを得なかった。そして同時に、興味が尽きない作品であると改めて認識させられたので

あった。

ただ、そうは言っても、小泉八雲の怪談・奇談を「救いの文学」と言ったところで、彼の作品に「出会い別れた」人でなければ、恐らく信じてはもらえないだろうとは思うのだが。

〈佳作〉

さくら

静岡県静岡市 山 梨 由美子

桜の花に人はどんな想いを抱くのだろう。

私達は桜の開花で春の訪れを感じる。桜咲くと言えば吉報、桜散るは悪い知らせ、葉桜、徒桜、あだざくら同期の桜等、日本語には桜を用いた様々な表現があり、桜は私達日本人にとって一番なじみ深い特別な存在の花である。

小泉八雲の『怪談』の中に桜が出てくる話が二つある。一つは「乳母桜」で、もう一つが「十六桜」である。この二つの話はどちらも愛媛県松山市の天然記念物の桜にまつわる伝説を題材に英訳されている。「乳母桜」は実の娘のように育ててきた長者の娘の病気を癒え願って乳母が身代わりになる話で、元の長者伝説と大差はない。一方「十六桜」は老侍が枯れた桜の樹を甦らせるために、桜の樹の下で切腹する話である。孝子桜と呼ばれ重病の父のため子が桜

に開花を祈った伝承とは大きく異なり、切腹が悲愴感を色濃く感じさせる結末になっている。乳母は長者の娘の、老侍は桜の樹の、共に大切なものの身代わりになることは二つの話に通じているが、この「十六桜」の原話との違いは何なのだろうか。

人間の力の及ばない大願を成就させるためには願う者も大きな捧げ物をしなければならぬ。乳母も侍も自分の命を捧げて願いを叶えた。そこには神様に願いを掛ける者の必死な覚悟が伝わってくる。だが娘を持つ私にとって乳母の身代わりは母性を感じる行為として共感できるが、老侍の身代わりはすぐには理解し難いものだった。老侍はどうしてそこまでしたのだろう。木には神や精霊が宿り、玄関先や庭先にある樹々はシンボルツリーと言われ、災いを避け、家を守り、子孫を繁栄させるものとみなされるそう。老侍の桜もそうした樹であつたのだろうか。侍は子供の頃に桜の樹の下で遊び、先祖代々この桜で花見を楽しんできた。庭の桜は侍一族にとって楽しい思い出を紡ぐ大切な花であり、家族のような存在だったのだと思う。はるか昔からそしてこれからも末永く咲き続けると思っていた桜が枯れてしまうとは、侍には全く思いもよらないことだったに違いない。枯れてしまった桜を見たときの侍の嘆き悲しみはどれほど深いものだったことか。ましてや侍も年をとって老人となり、子供達も皆先立ってしまった。愛する家族を失い、最後に残った幸せだった日々を彷彿させる桜の樹までも失った侍の深い悲しみを思えば、侍が桜の再生を願って身代わりを決意し切腹すること、侍にできる唯一の手段だったに他ならないと思えてくる。人

であれ、物であれ、命あるもの、いつかは死ぬ。しかし人間とは異なり、樹木である桜はこの先も人より長く咲き続けることができる。もしかすると桜の枯れ死は侍に己の最期が近いことを悟らせるものだったのかもしれない。そうであれば尚更のこと、楽しい思い出の詰まった桜を甦らせるために老いた自分の命を差し出すことに何の迷いもなく、寧ろ桜のために死ねる喜びすらあつたのかもしれないと思えてくる。唯一無二の桜木に寄せる侍の強い願いが切腹という行為になったと思えば、当初感じた悲愴感は消え去りただただ桜に対する老侍の一途な想いこそがより一層強く感じられてくる。

最初にこの話を読んだとき、原話にはない侍の切腹が気になつてならなかった。武士の時代であれば、切腹は武士道に則つた正しい作法と見なされ日本人であれば理解できるが、西洋人には野蠻で理解できない行為なのではないかと思えたからだ。帰化したとは言え、西洋人である八雲にとってはどうだったのだろう。八雲が桜の身代わりになるために侍の切腹を描いたのは何故なのか。命を懸けて大切なものを守りたい、その願いは日本人西洋人を問わず人間なら誰でも共感できる。「武士道」によれば、人の腹には靈魂と愛情が宿っているという思想があり、真心と潔白を示すために腹中を見せるのが切腹の意味だと言われているそう。老侍が切腹したこと、正しく侍の魂が桜に乗り移り桜の精霊と呼応して新たな命を吹き返したと言えるだろう。八雲は切腹を野蠻な行為と捉えてはいない。自分の命と引き換えに桜を再び花開かせたいという老侍の必死な願いは八雲に深い愛情に対する畏敬の念を感じさせ、武士である

侍には切腹こそが身代わりになる最も神聖な儀式と考えて描いたのだと思えてならない。

毎年ニュースでは桜前線の様子を伝えてくれ、私達は桜の開花が待ち遠しい。薄く淡いピンク色の花を咲かせる桜。可憐に咲く桜の花の美しさに私達は心を奪われる。満開の桜は見る者を包み込む優しさを感じさせてくれる。桜は花開いて咲く姿が美しいのは勿論のこと、ハラハラと舞いながら散りゆく姿にも儂い美しさがある。咲く桜、散る桜、桜の花には人の生と死を暗示する魔訶不思議な力が宿っているように思える。陰暦一月十六日の一日だけ花を咲かせる十六桜。この話を読み終えたとき、ふと、「花は桜木、人は武士」という諺が頭の中に浮かんできた。

講評

感想文一般の部は、応募数こそ前年度より減ったものの、力作が多数寄せられた。入賞を逃した作品にも印象に残るものがあった。

短編「破られた約束」をテーマにした優秀賞の感想文は、先妻との約束を違えた男ではなく、後妻が殺されることを「女を一人の人間として認めるからこそ」と分析。「死なせてもらえない」男は男性中心の日本社会を意味しているとも指摘する。取り上げられることが多い八雲作品だが、ジェンダーレス化が進む現代的な視点が新鮮で、興味深かった。

優良賞の作品は、筆者がもう一度読みたくて探していたという短い話を取り上げた。「無限の意味」を考えさせる短い最後の一文で「忘れ難いものになった」という筆者の思いが、巧みな文章運びでよく伝わってきた。

(講評者 佐々本浩材)

詩

〈優秀賞〉

鏡のなかの母

広島県呉市 木塚 康 成

空家になった実家の玄関には

七年経った今でも母のサンダルが

きちんと並んでいる

秋の終わり

家の前は植込みや柿の落葉でいっぱいになる

母はしだ帚とちりとりを持って

白い息を吐きながら

階段の落葉を掃き下ろしていた

そのサンダルの横に ほくは いつも

スニーカーを脱ぐ

そして

上がり框の正面には

丸い鏡が掛かっていて

一瞬ではあるが 自分が出迎えてくれる

けれども

薄暗い時間だとドキツとすることがある
母の右まゆには

ぼくとそっくりのほくろがあったからである

鏡を仕舞おうかと迷ったのだが

考え直して そのままにしている

母は掃除のあとで

よく その鏡をのぞき込んでいた

ときどき

頭や肩に葉っぱや虫が乗っていたからだ

ある日 台所でお茶を飲んでいたら

茶わんの中に毛虫が ぼとんと落ちてきた

きゅーと叫んで 一人で大笑いしたそうだ

母が亡くなる少し前に

初めて聞いたエピソード

それ以来 ほくは掃除が済むと

鏡をのぞき込んでいる

ヘルンさんは 不思議な昔話を教えてくれた

鏡がとともめずらしかった頃のこと

いまわの際の母が娘に

大事に仕舞っていた鏡を与え

「この鏡をのぞけばきっと私に会える。

だから、悲しむことはないの」

と言が残した

娘は鏡のなかの自分の顔を

母の面影と信じて

来る日も来る日も

鏡の中の影に語りかけたという

それは まるで

ぼく自身のように思えて仕方が無い

北風が吹いた日の翌日

落葉だらけの実家のまわりを眺めていると

階段の下の方で振り返った母が

鏡のなかで

微笑んでいるような気がするのである

〈優良賞〉

あの者たち

岐阜県羽島郡 久生

あの戦いのあと

平氏は山の奥に消えた

山の精霊に飲み込まれいく

山は静寂

草のように木のように

生きてゆく

草が物語をはじめ

木が物語をはじめ

山の精霊はじつと耳を傾ける

草の中に歌のうまいものがあらわれる

節をつけ 想いをのせて歌う

木の中に琵琶のうまいものがあらわれる

木にあわせて草が歌う

山が歌う

落ち葉にのせて歌が川をくだる

山の歌が海につたわる

いくつかの時代が過ぎて

山の歌は

海を慰めつづけた

アゲハチョウが海辺のまちから

山の奥へと飛んでゆく

〈佳作〉

蠅

埼玉県さいたま市 あんのくるみ

骨壺にとまった蠅を見ていました
畳に正座する奥様の肩越しに
じつと蠅を見ていました

正直に申します

わたくしは蠅に嫉妬しました

細い歩脚を突き立てて

あなたの骨壺にとまる蠅を

わたくしは羨ましく思いました

ああ、まさか

卑しい蠅が箆笥の前へ

ああ、まさか

箆笥にとまった蠅はわたくしを見ていました

汗をかいた麦茶の前に正座するわたくしを

じつと蠅は見ていました

正直に申します

あの蠅はあなただと直感しました
わたくしの口から奥様やお嬢様へ
あの秘密が暴露されやしないかと
骨壺から這い出してきたのだと思いました

ああ、まさか

わたくしがそんなことをするとでも

ああ、まさか

あなたが若死にした女ならば

どんなに悲劇であったでしょう

わたくしが文の中だけの男ならば

どんなに悲恋であったでしょう

いけません、わたくしたちは

死んでも許されないので

いけません、わたくしたちは

今の世で最も忌み嫌われる罪なのです

やがて蠅は落ちました

秘密を見上げたまま死にました

〈佳作〉

小さな幸せ

雪女へ

島根県大田市 山形 淑華

小さな幸せ 『きょうの料理』を手元に置いて 家族とお話する
一時が とつても 幸せです。小さなにんじん、の切れ端、キャベ
ツの残り、大事に食べる とつても幸せなのでした。飢えていた時
もありました。でも、雪女は 私を生かしてくれたのです。私は、
生かされました。私は、明日、夕飯に、とり肉のポトフを作るつも
りです。雪女に、たくさん お野菜を、お肉を、たくさん、たくさ
ん、いただきました。から、あきの、感謝祭として、大事に、お料
理させていただきます。火の神様と、一緒に、時を過ごせるのが、
本当に楽しみです。ありがとうございます。明日も、大雨かな。大風か
な。急に冷えてきましたから、寒さが心配です。しかし、窓を開け
放って、お料理の仕度^{しど}を、しないと、いけません。ガスコンロの火
で、なべの方のぐつぐつ煮えるのを、お肉やお野菜の火のとおりぐ
あいを、みながら、やわらかくなったかな、どうか。と、火の神
様と、お話ししながら、火の傍で、あたたまりながら、お料理したい
と思います。お野菜が、にこにこ、笑っている。どきどき、お肉の
胸が高鳴っている。様な、気がします。水の神様、冷たいけど、お
いしいお水を分けてください、ね。いつも、お水をいただいでいま
す。感謝しています。おいしいお水のおかげで、おいしいお料理を

作れるし、病気にもかかることなく、元気に暮らしていられます。
本当にありがとうございます。風の神様がおおわらいしていらつ
しゃる。おおおおお……という声が、うなり声が、木霊していま
す。夜九時です。木が、慟哭しているーおばあちゃんの魂を運んで
きてくれているのかもしれない。おばあちゃんの亡くなってから、
みなのが経った。から。お祈りしました。黙、とう。おばあちゃ
ん、心配してくれているのかな。元氣だよ。雪女がね、私を生かし
てくれたんだよ。火の神様にね、守ってもらったんだよ。お料理し
ているよ。つらいときもあるけど、周りの人が、いてくれて、幸せ
に暮らしているよ。あつたかい気分になるよ。あつたかい、お風呂
にゆっくり入らせてもらったよ。幸せだと思ったよ。お母さんと、
かんたんアップルパイを作ろうか、っていうお話をしたよ。うすく
切ったりんごを重ねてならべるのが難しそう。ここから、ほうつ
とおちついていけるよ。まるで、りんごが重力で心に落下してきた
みたい！すっかり両手で受けとめたよ。ハートの形に、ぎゅつと、
ね。おやすみなさい。はみがきして、ねるよ。こたえのない し
はかりしれない応答を聞く死をみた 初めて おばあちゃん おば
あちゃんと呼んだ日 変わらない娘の様な笑顔で迎えてくれた あ
の日 私は分からなかった眠っているとばかりに思っていた。いつ
もと変わらぬ笑顔 ありがとうございます ありがとうございます

《佳作》

まちのこどう

島根県松江市 日 下 踏 子

あなたがきいたという

まちのこどうが

まぼろしのうみをゆらす

あなたがきいたというまちのおと

ゆつくりとひくくひびくみやくはく

まちのこどう

ぜんでらのかね

ものうりのおんなのこえ

このおとはあおいいろ

あなたがきいていたまちのおと

ちらちらとひかるみなも

まちのまぶたのかすかなふるへ

くもがわきもやとかすみのみちるなか

てをうちならしいのおと うぐいすのこえ

このおとはしろいいろ

あなたはまちのおとをきいた

からころとひらめくつまさき

まちのあゆみ

おどるようにすすむあしおと

はしのしたのこぶねがみずをわけるおと

このおとはこがねいろ

あなたはまちのおとをきいていた

まちはゆつくりといきをはく

まちがゆつくりといきをはくおと

まちにゆつくりとひがおちて

まぼろしのうみがゆれる

このおとはあいわかばすみれこはく

きぬのいろ

うすすみいろのかげのなかで

かすかにひかりをうつしながら

いま

はねをたたもうとするたまむしのいろ

あなたがきいたというまちのこどう

にゆれる

まぼろしのうみ

いまはもうきくもののない

まちのこどう

いま

このまちの湖は
ゆれているだろうか

あなたがきいたという
まちのこどうが

きこえるあさにむかおうと
湖のりんかくのかたちで
ひとねむりする

そのばん

ふつくとこけむすてらで

かげおにをしてあそぶ

おさないこのゆめ
をみた

講評

応募数は五十一篇で、昨年度から微減であったが、取り上げられたテーマは大きく二つに分かれた。一つは、八雲の生涯や松江での生活等に着眼したもの。もう一つは、八雲の作品を下敷きにしたものである。特に、「雪女」を取り上げた作品が目についた。優秀賞「鏡のなかの母」は、八雲の作品世界の空気感や陰翳を作者の母の思い出の中に落とし込んで、しっかりとした骨格を備

えた現代詩に仕上げている。内容的にも読み応えのある作品である。

優良賞「あの者たち」は、叙情的かつ幻想的な美しい世界を描き出している。「木にあわせて草が歌う／山が歌う」などの作者固有の感性が心地良く受け入れられる。欲を言えば、終わりの2連のところをもう少し深めて欲しかった。

（講評者 川辺 真）

【審査員】

石原 康博	稲田 忠徳	内田 融
川辺 真	小林久美子	佐々本浩材
高嶋 敏展	丹羽 隆	

（五十音順）

表紙写真

松江時代の小泉八雲(ラフカディオ・ハーン)

1891(明治24)年 小泉家蔵

令和3年度

**「小泉八雲をよむ」
感想文・詩 入賞作品集**

令和4年3月

編集・発行 松 江 市
松江市教育委員会
八 雲 会